

港区立郷土歴史館

歴史館だより

特別展展示余話

1964年東京オリンピック発祥物語

小緑 一平
(学芸員)

半 世紀余り前の1964年東京オリンピックは、いろいろなものの発祥に関わっています。

例えば、駅構内などさまざまな場面で目にするピクトグラム(絵文字)は、世界からの訪日客が言語を問わず目的地に移動するため、1964年東京オリンピックの際に初めて本格的に導入され、普及に至ったものです。これにちなんで、令和2年度特別展「1964年東京オリンピックと都市の交通－今にいきるオリンピック・レガシー－」では、展示項目を象徴するピクトグラム(絵文字)を作成し、ポスターやチラシ、図録などでメインビジュアルとして用いています。

キストや副教材などを用いて授業を行う「オリンピック教育」が1970年代から始められましたが、1964年東京オリンピックを前にした日本の「オリンピック学習」は組織的に取り組まれた世界初の「オリンピック教育」といえます。

そして、1964年東京オリンピックの際に発行された記念貨幣は、日本で初めて発行された記念貨幣です。1000円銀貨と100円銀貨の2種類の記念貨幣は大人気となり、発行による収入の一部が大会運営費に充当されました。この成功により、その後も国家的行事などに合わせて記念貨幣が発行されるようになりました。

オリンピック読本
(高等学校・青年学級向け)

また、1964年東京オリンピックを前にして、政府は「オリンピック国民運動」を推進し、全国の学校では文部省作成の学校段階別『オリンピック読本』を基に「オリンピック学習」が実施されました。欧米ではオリンピック・パラリンピックを教材として取り扱い、テ



東京オリンピック記念貨幣

ほかに、ユニットバスや民間警備会社の誕生、冷凍食品の技術確立など身近で意外なものの発祥に1964年東京オリンピックが関わっています。特別展「1964年東京オリンピックと都市の交通－今にいきるオリンピック・レガシー－」を、1964年東京オリンピックと今日の私達の暮らしの関わりについて考えるきっかけにいただければ幸いです。

参考文献

真田久「オリンピック・ムーブメントとオリンピック教育」『スポーツ教育学研究』2015年Vol.34 No.2)

「早くも東京五輪商戦 64年大会硬貨や切手に脚光」(『日本経済新聞』2013年9月8日)



港区立郷土歴史館

歴史館だより

港区域にあった大名の江戸屋敷日記

—飯野藩保科家文書から—

岡谷 成康
(学芸員)

港 区立郷土歴史館では、港区に関連する資料を収集しており、その中に「飯野藩保科家文書」という資料があります。飯野藩保科家とは、上総国飯野（現、千葉県富津市）に藩庁を置いた大名家で、家の成立時から会津藩松平家と親類関係にあり、幕末の政治にも登場することで知られています。江戸時代から明治中期には麻布や愛宕下に屋敷を所有していたという点で港区とも繋がりのある家です。この資料の点数は 284 点、作成年代は主に幕末から明治末年の間であり、その多くが江戸・東京にあった麻布・愛宕下の屋敷で作成された、もしくは関係のあるものとなっています。以上から、この文書は幕末から明治中期の大名・華族と港区域の地域との関係、さらに大名・華族の動向や生活、財政についてうかがえる貴重な資料と言えます。今回は、同家と港区域にあった同家の屋敷について触れつつ、幕末の江戸日記についてご紹介します。

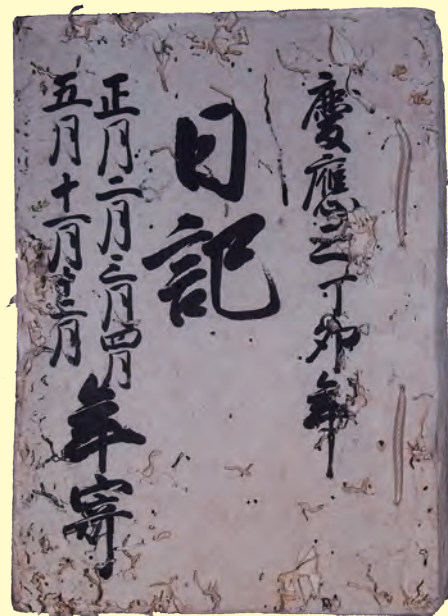
飯野藩保科家は、石高2万石を有した譜代大名で、南総の名門と言われました。慶安元（1648）年6月、初代正貞が1万7000石を与えられ、飯野に陣屋を設置して藩が成立、延宝5（1677）年7月、2代正景の時に2万石となりました。その後、一度も転封されることなく、廃藩置県まで存続しました。

『東京市史稿』（市街篇第49巻）内にある「江戸藩邸沿革」によれば、飯野藩保科家が麻布に上屋敷を置くようになったのは宝永7（1710）年です。現在の麻布十番三丁目、仙台坂の登り口の周辺が、その場所に該当します。以降、幕末まで同家の上屋敷の所在地であり続け、江戸における政務機構の拠点、藩主が江戸にいる際の滞在先として重要な場所でした。なお、同家の屋敷は幕末期には3か所に所有されており、前述の上屋敷の他、下屋敷が2か所であったようです。一つは上屋敷と同じく麻布（現、南麻布二丁目）、もう一つは下渋谷村（現、渋谷区広尾五丁目）にありました。

幕末の藩主であった保科正益（1833-1888）は、

慶応2（1866）年に若年寄に就任するなど、幕政にも関与しました。また、戊辰戦争勃発時には、会津藩松平家が徹底抗戦の構えを見せたことから、親類の関係にあった飯野藩保科家も新政府から警戒されました。飯野藩保科家文書に含まれる幕末の文書の中でも、特に慶応3（1867）年と明治元（1868）年の江戸日記は、江戸が戊辰戦争に向かって緊迫の度合いが高まっていく様子、開城された後の状況を記録した貴重なものです。例としては、慶応3年の江戸は緊張感が高まっていたためか、江戸詰の藩士たちへ夜間の外出を控えよとの命令が出されたことが挙げられます。さらに、当時の江戸における政治動向として、慶応3年冬から翌年春にかけ、朝敵となった徳川慶喜の罪を許されたいとの嘆願運動が江戸にいた譜代大名たちによって行われたという事実があります。飯野藩保科家も運動に参加しており、その際の動向も日ごとに記され、同家の立場から運動の内実を知ることができます。

当時、各大名家の江戸屋敷内では目まぐるしく変動する情勢に対応していました。各大名家の江戸の拠点であった上屋敷は、その一つ一つが政治の舞台であったと言えます。飯野藩保科家文書の江戸日記はその一端が見える資料なのです。令和3年度春の特別展では、この飯野藩保科家文書も展示する予定です。ぜひお越しください。



慶応3年の江戸屋敷日記